

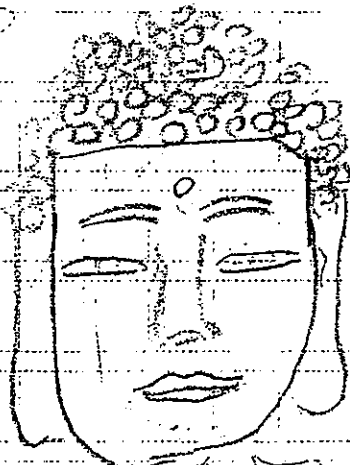
NO. 4

貴族の 世の中



ドドド

聖武天皇と奈良の大仏



大仏

税

病

害

聖武天皇は国の予算をばう大に使ってまで奈良の大仏を造ったのはどんな目的があったからなのだろうか。

災害

My 説 当時、例年のように洪水・日照などがあつたり税が重いため天皇への忠心が低くなってきた。そのため仏の名をかり天皇を頂点にたたせようとした。

災害や税(重い)からのがれようとする人々がたくさんできたので政治が危なくなつたため仏の名をかりた。

大仏建立の詔勅を発した聖武天皇の挿絵
(東大寺蔵)

仮説

聖武天皇は仏教の力で重い税、病気、ききんなどの苦しい生活から人々を救おうとした。

↳ 大仏を造った結果人々の生活はよくなったか。

証明方法

大仏を使った目的が本当に人々を苦しい生活から救おうとしたものかを調べれば証明できる。

— 1、当時のようす ——— (役民=えんちのたみ)

資料を見て見ると、ほとんどの資料^{から}この時代の農民は、とても苦しいことがわかる。この時の都に住む人々と比べられないほどの物である。どの資料にも、租庸調をおさめるといふことが「精いっぱい」という感じである。そのために、偽籍^レや逃亡といふことなどを行なったのであろう。考えてみれば、ここまでにもさせてしまふ、政治的なものがよくなかったといえるであろう。又、資料によると、よく逃亡したりすると、朝廷の土木工事に生身^レの人間が必要をため、自分の土地にも必ずわ

けである。ここまでする朝廷はちょっと考え
 ものである。また、これを逃亡するものゝ土
 地へ返そうとすると、自分の土地がわからな
 いといったところである。(これも当処に編付す
 る、ごく現地に登録したところだ。)こんな国
 と役(農民の《川とノリオ風追いかけて》は、
 そりがないほどあったという。この時期、そ
 う聖武天皇の天平国家という今でいう、新内
 閣、〇〇内閣のような時の不安な所に登板し
 たと言える。というのも死満塁^{シマン}かのように
 天平四年(七三二)は早害、台風^{タイフーン}にあり農作物の
 ほとんどが、不作であった。そのため、貴族
 らの食は保護されたとは思いますがその分役民^{セツミン}ら
 の食は、ほとんどなかったとされる。背景^{バックグラウンド}に
 は、朝廷の貴族だけの世界(世の中)のために動
 く物と、もしかすると聖武天皇の奥さんこと
 光明皇后は、実家の藤原の天皇をしのぐほど
 の強い権力をおいて、天皇に貴族のための世
 の中を実現させるような行動があったのかも
 しれない。まるで徳川二代目のようだ。(??)

そして、天平六年に大地震発生、あとを次いで、七年～九年にかけて、みなさんごぞんじの、天然痘が大流行した。九州から西日本方面へと広がり、やがて平城京にも及んだと書いてある。九州から広まった天然痘は、やはり、戦いか、商などで大陸から広まったのであろう。平城京に及んだのは天平九年で、とても多い死者の中には、有力な貴族たち、そう藤原の四兄弟(武智麻呂、^{ふちまろ}房前、^{ふさなご}宇合、^{うまが}麻呂)などもいた。ウーム、貴族でも病いには弱いということだ。そして、天平十二年には、死んだ宇合の子供の広嗣の反乱であった。災害のかたまりだ。広嗣の反乱をおこすきっかけは政治の不安定なのをよくないとし、そして広嗣は、資料によると、天地の災異が、たが重なるのも、結局は政治が誤っているからだ指摘^(しきつりご)していた、と書いている。やはり、天聖天皇の、天平国家のあやふやだったことをかんづいていたのは昔の人にもふくめ言うまでもないことであろう。逆に考えれば、反乱を起

すきでにいたってしまっただのも、それをけ、
朝廷、いや国家が乱れていたといふことにな
る。それには、天皇が、あまかったといふこ
とと、共にそんな天皇に背負いきれないほど
の課題が起きてしまったといふことも言える
であろう。資料をみると、奥さん(光明皇后)の
実家がさきに書いたように藤原の出であり、
その実家からの政治的な注文たいりつつけ
られたりと天皇は現代でいう「イローゼ」にな
ていたようだ。で、反乱した広嗣は皇后の血
のつながった甥にあたるわけで、天皇にとっ
ても、様は甥となるために天皇は、いどこか
らきでも反発(Not反叛)されたことになる。こ
のために天皇にとって心につきささった出来
事にちがいない。反乱は二十六名の死刑で、
終止文を打ったが、他人にこの乱は二カ月の
乱としか感じられなかったが、天皇にとって
この乱は一生忘れることのできない大きな
事となったにちがいない。このことも大仏を
造る上での一つの理由になったことであろう。

悲しい人である。こんな世界であつたために
 山上憶良の「貧窮問答歌」という歌が出来るしま
 つになつたのであろう。この山上憶良といふ
 人が、名高い人なればそれだけに歌を作る必
 要性があったといえる。貴族たちは、「あおに
 よし 奈良の都は咲く花の におうがごとく
 今さかりなり」と歌っているのたか(数p)。こ
 んな表向き、貴族達には、天皇は笑えり、そ
 してその人々、またこの国をささえているとい
 える、役民(農民のこと)達にはきかしい目でみ
 ている、といった感じである。様は、こんな
 世の中でもまずしい人はまずしく、昔とほと
 んどかわっていないのである。逆にもっとひ
 びくなくなっているかもしれない。

山上憶良「貧窮問答歌」を
 引用

「楽毅論」光明皇后の署名「藤三娘」

聖武天皇宸翰「雑集」

※上の古文書(写真)を引用

このように、資料を見ると「性格は、書に出るものである。それを考えると、右の光明皇后が署名した書物は、線の太い豪放な字。対して左側は聖武天皇の線の細さ。」「^(こま)こまぐれはみなさんもおわかりでしょう。どちらにしろ、このころは、乱れ多い時である。(又、天皇は、こんな時びもけん命に天皇の地位を守っていたといえる。人間の本当の姿?)

天平十三年(七四一)、聖武天皇は、大仏建立のための第一次を開始したのである。それは、鎮護国家の前ぶれである、全国六十八か国への国分寺、国分尼寺創設の詔である。以前、そう太子のころから公式に伝わってきた仏教

は、とんどん、ごぼうぬきかのよう^に普及し
 ていた。それが、飛躍^{トビダツ}的^{テキ}というべきが、その
 ようになったのは、聖武天皇の、この時なの
 である。資料によると天皇は、経典の全国頒
 分、又読経の積極化と、それに続いて国分寺
 の詔が老令されたのであろう。考えてみれば、
 駄なびに聞く、国分・国分寺とは、寺にちな
 んで地名をつけたのだらう。天皇は詔の中で
 「国表かに人衆しき、災い除き神至るため〜
 災いは相次いておこる。そこで聖光明最勝王
 経」(の貴族らにとって都合のよい所一部^{自註})
 の理念によって一切の障言は取り除かれるで
 あらう。(一部略す)」と、これどこまでの時の
 神だのみの考えといえる。又、これは資料に
 よるとだが、さきも書いた通り、困難に弱く
 ともいえる天皇が、一から十まで実行すると
 いうのはとうていむりなために、いざとなれ
 ば、光明皇后がでるのである。したが、て皇
 后が国分寺を造ったとある。やっぱり。この
 ころから、やはり天皇の、自分自身に対する

力の底をついた感じで、昔、仏教により大成功をとげた太子にならぬ神の名をかりたのであろう。が、もしかすると、この国分寺は、各地に天皇の名を乗せた仏教を多くの民にわたせる感じで災害とてにも、政治的、反乱をおこさせないようにすることなのかもしれない。するとやはり皇后建造説は正しいといえる。(貴族もこれだと...) 天皇、皇后達にと。て、大陸から伝って来たこの仏教はどよい物はないのである。ある意味では、国分寺と、奈良の大仏の建設目的は同じようなものである。フムフム。それは、貴(皇)族らには出来ないといっている。それが、天皇の力を表しているのかもしれないが、後ろには、藤原(橘)という貴族がいるのを忘れてはならぬい。

オマケ —

橘氏とは、このころ、天皇ともはり合える藤原氏と同じくろいの力をもつ現貴族である。このあとに続く「都移し」の中で、少しかげがある。(橘氏が天皇を勧誘していたという) 126

一 2. 大仏造りの目的

以前にも国分寺などを作ったことがある、聖武天皇ではあるが、なぜにまた、大プロジェクトを立ち上げて大きな、とてつもなく大きな大仏を造る必要があったのだろうか。このことに対しこの一番の理由となることは、天平十五年(七四三)発令の詔にあった。それは、「〜全国きでわたくしの仁徳が及んでゐるようだが、仏法の徳恩はまだすべてに及ばなていない。〜」(くわしくは日本放送出版協会発行 NHK 歴史への招待 vol. 7 p. 37より) これを見ておわかりの通り、全国に寺を設けても、それでもまだ(天皇の)仏の力は及ばなていないと言っているのである。不思議だ。が逆に考えると、国分(尼寺)といふのは単なる先発で大仏を造るといふことが本当の目的だったのかもしれない。まあ、どちらにしても、天皇の再建といふか、天皇が天皇の位をとりもどすためのことではなかるうか。そして、めっぽうの仏教好き(か、あるいはあつかいやすいといふ

か...) な天皇の仏を重んじるあまりにやった
 鎮護国家の姿勢からことはたしかだとされる
 この時の、仏の力というもとは見身にあまる物
 だろう。うん。このころの出来事で不思議な
 のは、天皇が、ちよくちよくと都をうつして
 いたことだ。そのために、約、移した回数四
 回も無意味な行動と年月、さらに「金」までもっ
 いやしてしまったのである。これは、と中、天
 皇が大仏の詔をだしたということもあるが、
 やはり、藤原から、橘からにげるといふこと
 もあるかもしれないが、逆に両氏が進めてい
 たことも考えられる。それは別荘的な感じで
 動いていたのだろうか。しかし不思議な事だ
 った。そんな中で、詔は発令された。当時
 天皇は紫香樂宮というさきの「無意味の都」(これ
 はどうか...)の内の一つに、滞在中だったた
 めに、この宮に大仏をたてる計画だったそう
 だ。けれども資料には、こんなことが書かれ
 ていた。それは、最初大仏をたてる予定地ニ
 と紫香樂宮の近くの山にひんぱんに起たたと

い。うわけだ。そしてそれは放火ではないか。
とあるのだ。これは、再び資料へともどるが
天皇を平城京にもびそとすゝる勢カがあつた
といふ。そしてそれは、山林への放火となつ
たのではなかつたか、とある。これは、天皇
が紫香樂宮、重用役人は難波宮となつていた。
そのために、いまにも政治がたおれそゝる所
に、またも政治がしにくく混乱を巻き起しそ
うで、人々の不安をきねいていたから放火と
いふ結果になつたのである。天皇の頭が、
ふっ切れてしまつたといつてもよいだろう。
が、け、きよくマネキロボットと化した、
聖武天皇は、役人たちの言をしたが、天平
十七年に平城京にもびつたことでおちつた。
この時、完全に今までの都終し、『遷都』は無と
なつてしまつたのである。悲しー。大きな、
とても大きなあやまちともいえよゝか。又こ
れだけのことをしても、後で大仏を造つても
よいくらいのことができるとは天皇の力を感
じるではないか。が、それも、全部が全部無

駄骨を折ったわけではな^いのだ。紫香楽宮で
大仏を造ることをやめても、平城京でも造れ
ないことはな^いのである…。大きな物を残し
たのだ。これこそ、不幸中の幸いといっ
つ？。そして大仏建立はスタートを切った。
その中び、都移しに次ぐ謎では、『行基』という
僧の登場と、存在である。この行基という僧
は、最後には、すばらしい役、大僧正となっ
たものの、一時は、なんと小僧、小坊主など
と言^{われ}ていた。そんな行基の行動(小僧の時)に
は、資料によると、養老元年(七一七、聖武天
皇の一代前の天皇の元号)ごろから小坊主行基
は、大きな力、そう内閣のような朝廷にまで
も名を広めた。が、それも小僧としてだが、
まあ、このころ僧が榮る職だったために、ろ
くでもないとも思ふ人もいるかもしれない。
けれども実在はそうではなく、どちらかとい
うと、このころの仏教は、民のものではなく、
天皇だけ(諸族)のものということを大きく、そ
う大に感じさせる。それは、資料によると、

「みだりに町を歩き、そして弟子をもかまえて、
罪惡を〜」とも朝廷は伝えられている。又、
天平二年では、こんな(の)行基も、多数の民衆
が野外集会を開いた。多き時は、一万人以上、少
き時は数千と、今の日本での集会では考えも
つかないほどの人数である。時にして、この
ころの人口が、約六百万人の内たったの六百
分の一ではあるが、率的に言えば、非常なほ
どの多人数である。そのようなことからすれ
ば、民衆を大勢の民衆を後においた行基を取
り上げざるうまいといふことはありえる。そ
れは天皇をしのぐほどの民衆の注目をあびて
いるかもしれないためだ。うーこすごい。た
た一人が長年の力を持つ天皇が負けるにいた
る感じを感じたためであらうか。なぜに民衆
の力が行基にまわったのかといえば、天皇が
ホーッとしてきたといるか、奈良時代に入
ると、以前にも書いた通り、税をのかれるた
めに、役民(農民)がやった物が続出してきたり
したので。そんな人の心をゆさぶったのが、

きつた
律

の
ため
に
け
る
と
令
国
家

この行基といふわけだ。様するに、一万二
 天皇らと初めとする、貴族の世の中への反対
 をいなく物^有ともかん算できるであろう。世の
 中の乱れを感じる、それも強く大きく感じさ
 せている。行基は、河内(和泉?)国の出身で、
 百済系渡来豪族、つまり大陸からの帰化人で、
 豪族とは、日本の物よりもすぐれていたとい
 う昔の目(数P24 2)のためであろう。そんな不自
 由の少ない生れであったのだ。(父も母も帰
 化人という。)で、十四、五歳で家を出て、後
 の名高い行基も、寺では、学問と修業に力を
 注いでいた、とある。そこで、集会などのた
 めに必要な物を学ばせてったことだろう。が
 行基は集会までにはゆかない物の、一時托鉢僧を
 夢んだ後、だんだんと集会にいたったのだ。
 だから、最初は少ししかいなかった、弟子的
 人々も、行基の政府(朝廷)に負けないうに進むと
 いう、行基の影響力のよさなものにひかれて
 いったにさがない。そのために、そんな心
 強さが、いつのまにか弟子を増し、しまいに

は「万人」となったのだ。又、行基を取り巻く弟子が、これだけいるとこのももう一つある。(まあこれ一つじゃあ...) それは、政治から苦しめられている人達のことを考えた行いであった。内容は公共土木工事というたような物で、いかにも農民達を思ふ「ものがある。土木といふからには人手を多く必要とするのだが、弟子ら集まった人々を動かすことが出来る行基であるためこれらの工事はあちこちに行なわれた。この工事のことだが、資料を

みると、行基はずいぶん頭のまわっている人、今なら、清々としたような感じ、事業

行基の土木事業 行基絵伝の挿絵

家ではとある。これは、あっちでも、こっちでも行基の工事がうきくいった(特にこのころは近郊)のは、それなりの計画が、必要なのだ。

で、それを、無数にやっていたら、事業家という説は、少なくともまちがっていないと言える。この行基は何の目的があるのか。^{「謎」}がある。けれども、(まあ)民衆のことを思う行基に対しての目は天皇の鎮護国家の姿勢から、仏教は国を守る、いや国を治める時だけの大切な「物」だった。だから、鎮護国家以外の仏教の「使用」は、どんなによいこと(?)をしても、行基のように悪徳僧侶と非難されたのだ。で、このころの仏教は天皇の物。となり、そして以前から配布されていた経などは、^{こたゑのため}役民のいたる所まで政治がおしよせているといっても過言ではないはずだ。が天皇は利点の多い仏教を使った政治のうらをつかれた。それが、天平国家のころ、つまり聖武天皇の時代だ。それは、行基が行なったりした公共事業などで、天皇よりも行基の方に民衆がかたむいたためだ。それが、以前に書いた大集会へとつながる。後に^{のち}強力になった行基は、国家でおさえきれなくなり、仏教の民衆への法を改め

そして行基をみとめざらうえなくなったため
小僧が、『大僧正』という僧として国家が小僧を
向かえ入れたのだらう。何か変な変化、しか
し、よくよく考えると最初からしくまれた行動

だったのか。

…ぶらうに

しても、行

基は、大仏

造りで、大

きく手をか

している。

というか行

基はたまさ

れ利用され

ていったの

だらう。

……

……。

……

……

……

行基像の写真

—— 2. (Vor II) 大仏造り開始とその中身 ——

いきまで数ページによって大仏造りにいたるまでの動きなどを書いた。その中で、大仏造りのための最も重要な部分、いや所ともいえるか。それは、天皇の出した詔である。天平十五年発令の、当時、紫香樂宮で建造予定の物だ。ちょっと不思議なのがこの詔の中の数ヶ所である。その内の一つは「ったい天下の富を、天下を移がっているのは、朕である。こうしたカを利用してこの仏像を造立する」(各資料を改す)これは不思議ではないがこのころの天皇の心の中が、もろに出ているようだ。それは藤原かこの皇后、そして他貴族の有力化、それにともなう律令国家の崩壊、そんな中で、自分「天皇」は自分「天皇」らしく生きてゆく、「朕はこの世で一番の天皇である」ということを感じさせるシーンといえようか。又、天皇が、これほどにまで強大な像を作ったのは、他の有力な貴族がおいつけない物を、「自分は朕は天皇なるぞ」

と力を見せているかのようだ。そして、大仏に引用した仏の名は、その名も知された、「ビルシャナ」その意味は仏教の言葉で一この世をあまねく照らす、光輝に満ちた太陽だったのだ。これも、世界を照らす、中心点を意味するべく物である。今から約千二百年前、乱混とし、悲劇の天皇《聖武天皇》の悲痛を願にこの世を、巨大たる金仏像により我が手に出来る地上の極楽世界をきずき上げようとした、何とも夢又、夢の構想であった。

もう一つの不思議とは、「自分から進んで参加してほしい。強制的に国司らが行かせてはならない」これこそ不思議である。このために

天皇は、まずからもって、参加の意をしめすため、夜で土を運んだのである。

大仏の台座蓮弁に刻まれた仏像の図解

中心が大陽ビルシャナ

しかし事実ちがった。プリント資料の「にげ帰
た男」と多数の資料からわかるように、実際
進んで建立に向った人は、いたるうが、反
対に、勝手においやりされた物もいた。自分の意
とは反対に、無利矢利、強制的に参加させら
れたのだ。それは、国家などが、国司郡司へ
人の売買を求めてゆき、そして、人々が売ら
れていったのだ。やはり二のよ様な事実は天
皇には伝わらなかったかもしれない。

行基、それは、すごいくういの民衆からの
人気、及び技術的なものを秘めていた人だっ
た。そんな行基は朝廷(国)から日本初大僧正と
なった。この、今ではまるで「政治界の人間」と
化した行基は、後のものすごい数の労働人口
と、技術をもっていた。そのために行基は大
きく利用されたといえる。というか、行基は
ここに持ってこいの人物だったといえよう。
だからこそ前もって国家側は、行基を大僧正
として大きくとり上げられたのである。で、
行基は、大きく大仏造りに力を入れていたの

だ。が、行基は、閉眼を待たずに、閉眼の四年前、八十二歳の年月を仏に終えたのだ。

大仏造立の中で大きくて二つほどの難があった。夢又、夢、そして弱気な天皇にとってどんなになやんだことだろう。その内、一つは、夢で来てしまったため、大事を大仏をどのようにして造るのかということだった。これは解決したのだが、

考えたのは、これまた大陸からの帰化人。やっぱり大陸の文化はそうとう進んでいたのだろう。

もう一つは、しあけの大切な金が無かった。計画があるのだが材料がないというのである。なさけないようだったが、しかたがなく、日本には金など出土しないと考えられていたためだ。何か間がぬけている感じがした。そのために消極的な金をぬるのはだん念していたようだった。すると、そんな時、ちょうど陸奥国で金が出土したというのだ。そして国守が九百兩ものの金をたてまつったのである。あまりの

だんか資料だろう。

何とも言えぬタイミングのよさに、S47年当時の井上さんも、「作られた大仏ムード」と記している。が資料によると、近年の調査でいまでも少量だが砂金がとれるようだ。芝居ではなかったようだ。まあ、もしかしてだが、この時を待って計画的にやったのかもしれない。どっちにしても、労働者の総計二百六十万三千六百(五百)三十八人、これは、完全たる数字とは言われないものの、約十年間におよぶ、一種のリゾート開発ともいえる、地上の極楽世界をめざ時の大事業(※)は終上符に向った。それは、民がめざした閉眼の日であった。

—— 米 1 オマケ一時の大事業 ——

この大仏造りの組織はものすごい物だった。それは、大仏造りだけでも目をみはらせるほどの物だが、なんと昔に分業システムを使っていたようなのだ。今でも考えられなほどの事業をやるという所から、自然と分業が成り立っていたのだろう。(図)

一 3. 大仏開眼・完成後

金の産出(土)にともない改められた元号、天平勝宝四年四月、この時、十年間以上ものの年月をかけた、大仏が完成したとともに、長年の天皇の願いがやっと実ったのだ。ありとあらゆる風にふき回された天皇はびれだけ喜んだのだろうか。開眼供養の式の時、この日本の、最高の血となみだと汗のけっしょうができたのだ。とこつもなく華やかであった。かといって、一番の人間、

行基は死んでいたのだ。また、だれよりも早くこの日を待っていた天

開眼縷(大仏開眼供養会の時、聖武天皇ら参列者が握り功德を受けたという)
(正倉院宝物)

筆と筆管(大仏開眼用具)
(正倉院宝物)

皇もまた病気がちとなる弱体となり、天皇中心の世界を子にたくしたのだ。悲しい人だ。本当なれば、天皇がとるはずの関眼筆を一人の僧に、これまたたくされたのだ。僧が筆をスレた時、天皇はなみだを流したことだろう。が、とうとう自分は自分の位を見失いなってしまうたはずだ。

そして、天平勝宝八年五月二日天皇がなくなった。葬儀の法は、聖武天皇が進めていた仏教にならひ仏武でおこなわれた。法皇の最後の日には、光明皇太后は、天皇が生前大切にしていた物を、天皇が造った、天皇のあかしというか、そんな感じの東大寺にそのまま頂けた。資料にはそれなりのわけがあるが、もしかすると、この後の行動を合わせると、もう天皇のことは一切忘れようとしたのかもしれない。(この後、26ページへ)

「東大寺を造って人民幸甚す、ごとく諸兄の子の言葉だが、人民をかえって苦しめたといっている。

大仏を天皇に造らせたのはだれか——^{指画者}
 これは紫香^{スミカ}の宮のころは、橘^{たち}諸兄だった
 とされる。というのも、都移しのころ、なん
 だんと、聖徳太子^{ホトリ}のいた、土地からはな
 れていったのだが、それは、相手貴族の藤原^{フジワラ}の中臣^{ナカノミ}
 氏のいる所からなるべくはなそうとしている。
 それは、藤原と天皇がつくと、立場がなくな
 ってしまうためだ。が、平城京に都かもどって
 しまったために、力を失い、諸兄のおそろし
 が、ていた、藤原と天皇が、つながったため
 だ。要は、^企画は諸兄がぎりぎりまでやった
 のだ。分業もこの時出されたのだろう。する
 と、都をもとにもどしたために、悲肉なバト
 ン^{バトン}になったのだ。そのバトンを受けわ
 ったされたのが藤原仲麻呂^{フジワラノナカマロ}である。ほとんど完
 成した企画にちょっと手をくわえて、この事
 業で藤原の力を強めたのだ。そんな中でひさ
 しく諸兄の子、奈良麻呂^{ナガラマロ}は、「反逆」といふこと
 で消えるのであった。後、天皇が死んだあと、
 光明皇太后と、仲麻呂は、天皇をしのぐ力を

持ち、それが、蘇我らの行動に似てくる。

—そして、仲麻呂は、恵美押勝と名を改め
藤原の政治を始める。が、四五年のち、敗
死した(これはプリント資料につづき)

東大寺遠望の写真

そんなことは知らずに親く、
東大寺である。

大仏殿の写真

結論 この証明を主にしてゆくと一部の意味として仮説は正しい。及び、その他はさてめに書くことにす。

まとめ—————

いったいゼンたい、この大仏造りには何が秘められているのだろうか。その前に以前の様子を見て見ると、聖武天皇のころは何かと不都合なことが続いていた。一つは、立て続けにおこった災難である。有力な貴族とともに、一番下で国をささえる役民らが、逃亡など、どこかに身をかくすのである。このようなことがあったししたため、聖武天皇は国をまとめようとした。これが、聖武の仏教を広め、「きじない」という今ではほとんどいられない部分を使っている。その前に藤原広嗣の乱である。これはそう大きな物ではないが、天皇自身心につきささったはずだ。いとこからまとめてもらえてないという悲しい思いから、急速に、自らもって仏教を推めるという感じ

で、国分寺を造らせたのだろう。これは、ぼくの考えだが、一つめは、日本じゅうの者に、仏教をもつて力を、と、二つめは、これを何かの(国を治める)中心点とさせていたのかもしれないことだ。だから、今でも国分などのついた地名の所かさかえている所がある。又天平十五年の詔と同時にスタートを切った、大仏建立だが、その前の都移し、あれは、きちんとはしていないが、このころの有力者、諸兄が、藤原と天皇を別れさせたといふ感

美濃国分寺塔跡の写真

じて進めていったよ。この後め、きり諸
 兄の名が聞かれないのは、無論、平城京に都
 をもどしたためショックで死んだといふ。そ
 して、行基。この人は、大仏造りのための一
 生といっても過言ではなからう。一時は、民
 衆をわきたてた行基だったが、大僧正となると
 名をあまり聞かれない。(これのことは、行基の
 るぎりといふ。)大仏造りの表向きは、鎮護
 国家による、国をよめである。が、もう一つ
 の裏では、くずれさる律令国家の中で天皇う
 しく天皇として見せるぎりぎりの力を見せつ
 けている、見せているよ。かどちにし
 ても、この大仏を造って天皇の表ばんがよくな
 ったといふことは、書いていない。かえっ
 て、悪くしたといえる。このことは、奈良
 麻呂の「東大寺を造って人民幸舌う」は、こ
 れがよくわかる文である。

—— ジえんど

「けい、あらはあ」

《使用資史料》

◦ プリント資料

◦ 小学館 日本の歴史 ④ 貴族の世の中

◦ 角川書店 日本史探訪 第三集

◦ 日本放送出版協会 (NHK)

歴史への招待

◦ その他

教科書、資料集他